

## 〔生理学の広場〕

## 新美良純先生を偲んで



新美良純先生はかねてより入院加療中であった東邦大学医学部附属大森病院で、平成3年12月25日、肺癌のために死去されました。享年68歳でした。先生は1942年に早稲田大学文学部哲学科心理学専攻に入学されましたが、第二次世界大戦の戦局と共に勤労動員、そして学徒臨時徴兵での入隊を余儀なくされ、戦後の混乱期であった1946年に学部を卒業されました。大学院への進学後はそのまま助手として大学に残られ、専任講師、助教授、教授へと昇格されました。

早稲田大学心理学教室では、既に1933年頃から故戸川行男先生を中心として、皮膚電気反射（GSR）を用いた連想等の情動測定や嘘発見などの応用研究が行われておりました。先生はそれら一連の研究を引き継いだように思われます。しかし戦後の極端な物資不足の中で研究を再開された当時の様相は、1974年の早稲田心理学年報「特集 生理心理学・精神生理学」に先生がお書きになった文章「……実験室の破損機械整備のために、焼け跡の無線機等からネジを外してきたり、似通った2つの機械から1つの機械を再生したりする

ことに多大な時間と労力を要した……」ことから窺い知れます。研究の再開時に、当時国立東京第二病院研究検査科におられた故藤森聞一先生との出会いと、懇切丁寧な指導を仰げたことは、その後GSRの研究を進める上で計り知れないものがあつたと、生前に幾度も述懐しておられました。

このような機会を契機とされて先生は終生のテーマとなった皮膚電気活動の基礎的研究を手始めに、皮膚電気反応の条件づけから、皮膚電位活動の測定方法論の確立、さらには皮膚電気活動の応用研究まで網羅されました。まさに情動指標としての皮膚電気活動の研究に明け暮れた、といっても過言ではありません。1959年、心理学者としては当時珍しかった医学博士の学位を、藤森先生のご指導により北海道大学医学部で取得されました。先生の研究業績の精髓は単行本として刊行された「皮膚電気反射. 医歯薬出版, 1960」, 「皮膚電気反射—基礎と応用—. 医歯薬出版, 1969」, 「皮膚電気活動. 清和書店, 1986」に集約されております。

1963年頃から先生は皮膚電気活動を主要な指標とした睡眠の生理心理学的研究へとテーマを発展されました。睡眠研究を始められるようになったきっかけは、1962年から1963年にかけての国内研究員時代にお世話頂いた、東京大学医学部脳研究施設の故時実利彦先生との巡りあいだったようです。

先生は日本生理心理学会の生みの親でもあります。生理心理学・精神生理学の若手研究者を対象として、1968年に生理心理学・精神生理学懇話会を発足させました。当座は在京の若手を中心に組織しておりましたが、懇話会の回数と共に、他大学からの参加者も増し、ついには全国規模の懇話会となり、1983年にはこの懇話会が中核となって学会に発展しました。先生は表面に立たれることなく、常に裏方の煩雑な仕事を引き受けておられましたが、とりわけ学会の機関誌刊行には心血を注いでおられました。現在会員数が約500名の学会になれたのは、先生のこの学会へ対する深い思い入れがあつたればこそと思われます。

先生は新たな研究場所を求められて、1973年に早稲田大学から東京都神経科学総合研究所へ転出されました。そして創設間もないこの研究所の専門参事として、睡眠の生理心理学的研究を継続されました。その

後、1979年から1988年までは東邦大学薬学部教授として、さらに1988年からは東京家政学院大学人文学部教授として、学生への教育に情熱を燃やされる傍ら、皮膚温の生理心理学的研究を始めておられました。

先生は1987年国際パブプロフ学会において、ガントメダル授与の栄に浴されました。条件反射研究の関連で顕著な業績をあげたことが授与の理由でした。私ども

一同この慶事に大喜びをしたことが、つい昨日のように思われます。先生が早稲田大学をお辞めになられた後にも、学会や研究会等で、頻繁に先生の訾咳に接することができました。まだまだ沢山教えて頂くことを期待していた矢先の訃報でした。非常に残念でなりません。ここに謹んで先生のご冥福をお祈り致します。

(早稲田大学人間科学部教授 山崎勝男)